

Title	近世青海諸部落の起源 (上)
Author(s)	佐藤, 長
Citation	東洋史研究 (1973), 32(1): 78-106
Issue Date	1973-06-30
URL	http://dx.doi.org/10.14989/153502
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

近世青海諸部落の起原 (上)

佐藤 長

目 次

- 一 グシハンの青海進駐
- 二 青海ホシヨト部の成立とその範圍
- 三 青海ホシヨト部の系統とその牧地
 - (一) オチルハンダヤンの系統
 - (二) オンボの系統
 - (三) ダランタイの系統
 - (四) バヤンアブガイアユシの系統
 - (五) イルドゥチの系統

一 グシハンの青海進駐

一六三〇年代に、ジュンガリアにあったホシヨト部 Qosiyud の部長グシハン Gusi qan (>Gu gri khan、固始汗、顧實汗) は青海に進駐し、更に一六四二年にはチベットの中心ラサに進出してツァンパカン Gtsan pa khan (藏巴汗) を撃ち、全チベットを征服した。その長子ダヤン Dayan の直系は引續きラサに駐在し、ダライラマの保護者となった

が、他の諸子の系統は概ね青海に駐牧し、所謂青海厄魯特または青海和碩特として名が知られるようになった。いずれの系統もチベット、西北邊境の政治勢に多大の影響を與える存在となつて、史上にその名を残している。それにも拘らず、青海に駐牧した諸子の子孫がどのような系統であり、何處に牧地を持っていたのかなどの問題は、一向に明かにされていない。本稿ではそれらの問題をできるだけ詳しく扱い、清朝初期の西北事情の一端の解明に些かの寄與をしようとするものである。

さし當つてグシハンの青海進出は如何に行なわれたかという問題から始めよう。グシハンが青海に進出した事情は、既に山口、アーマッド Z. Ahmad 兩氏の研究^⑥によつてよく説明されている。即ちグシハンは、ゲルグバの壓迫されている事情を或るラマから訴えられ、實情調査のためラサに向つた。途中青海のチョクトウハン Cofu gan の子アルスラン Arslan に會つたが、アルスランは軍を率いてゲルグバを覆滅するためにラサに向う途上にあつた。グシハンは彼を説得し、その意圖を抛棄させたが、その年のうちに大軍を率いて青海に現われた(青海史四三四頁、AK. p. 36)。

その年(二五三)に、グシはジュンガルのバートルタイジ Pha thur the je (△ Bayatur tayji) と聯合せる軍を率ゐ、この地方(青海)に到着せり。道はイレ Yi le' タリム Tha rim' ヲータグ Has tag の川、大ダム Hdam chen po の秋冬の候に氷結せるを渡りて、青海の境域なるブルンゲル Bu lun ger に到り、人馬の疲れたるを癒し、多くの種類の獸の住む山にミンガンヤムトゥ Min gwan yam thu の名を付けた。丁丑の年(二五三)の正月、青海の高地に至り、一萬の兵もてツォクトツ Tshog thu (△ Cofu) の軍三萬と激戦せり。二つの山の嘴は血もて赤く染まり、故に今日「それは」大小ウランホシヨ U lan ho go と稱せらる。御子ダヤンタイジ Tha yan theji je (△ Danyan tayji) 率軍とともにツォクトウの殘黨をハルゲル Har gel の氷れるによりて「渡り」追いて破りぬ。若干の兵はその東側の谷に向い、その所を占領せるにより、今日「そこは」シャハル Ca har と稱せらる。首領のツォクトウは土撥鼠の穴より引出され、捕えられて、ゲデンパ Dge ldan pa (ゲルグバ)の敵敵は打ち破られたり。

楊和璫氏は青海史の譯註において、バートルタイジはジュンガルのバートルホンタイジであるとしているが (AK. p. 72, fn. 90) これは青海史の後の文で、グシハンよりバートルホンタイジ *Pha thur hung the je* (Baratur gong tayji) の稱號を贈られていることから間違いないところといえる。楊氏は更にイレはイリ *li*、タリムは *Tarim*、大ダムは *Tsai-dam* (Tshwahi *hdam*、ブルンゲルは *Burun kure* だとするが (ibid. fn. 96)、ブルンゲルはその所在として記す布隆吉爾河ではあるが、エムネブルンギル *Emüne bulanggir* とすべきであろう。十三排圖によれば布隆吉爾河は青海湖の西に小河川として存在する。ヘータグのヘー *Has* はタリム盆地から青海に抜ける道の要衝ガス *Lasaiyu* (噶斯) の訛語であろう。タグ *tag* はトルコ語の *dag* で「山」であるから、ヘータグはガスの近傍にあった山で、トルコ語訛した名稱と考えられる。その山の側に川が流れていたのであろう。ウランホシヨはやはり楊氏のいうごとく *Ulan qosū* (Uliyan *qosū* (山嘴) である (ibid. fn. 97)。この文はグシハンがタリムからガス路を通り、ツァイダムに沿うて青海湖の西端に達し、そこで一萬の軍を以てチョクトウを打ち破ったことを示す。更に青海史四三四頁には、

戊寅の年 (二二六)、己卯の年 (二二七) と順次、グシハンのジュンガルすべての旗もまた青海の方面に到着せり。

とあるから、前引の文と併せて見て、ホシヨトのかなりの部分が 一六三七、三八、三九年のうちに青海に移動したことが確認されるのである。

そこで移動してきたホシヨトは何處をその根據地としたかであるが、これにも青海史が重要な史料を提供する。スンバケンボ *Sum pa mkhan po* はこの書の中で、自らの生れ故郷のトリ *Tho li* に係けて次のごとくいう (青海史四三七頁)。

大王グシの三人の妃に生れたる十子の家の大部分の子孫は、最初に青海のムチュ *Rmu chu* の畔のトリといわれたる所を領し、オイラートの右翼 *Pa ron gwar* (Barayun *yar*) と稱せられたり。

楊氏はムチュをマチュ *Rma chu* (黄河上流) の誤と見ているが、同感で、従つてトリは十三排圖において、青海湖の南側、黄河に沿うて托里達巴漢 *Tho li dabayan* (トリ峠)、托里布拉克 *Tho li bulay* (トリ泉) とある所であろう。

また青海ホシヨトがオイラート右翼と稱せられた記事は、寡聞にして本書以外にはない。勿論これに對するオイラート左翼はまさにジュンガル *Jegün yar* (準噶爾) で、この文はジュンガルという言葉の持つ意味を明かにする一つの材料となるであろう。尤もスンバの説明によればホシヨトは青海に移ってから、即ち本地のジュンガリアより南下してから右翼と呼ばれたごとくであり、本地にいたときも四オイラート *Dörben oyirad* の右翼に屬していたかどうかはこの文では不明である。

それはともかくとしてここでは、グシハン一派が最初には青海湖南岸、黄河の畔にその根據地を置いたことを明かにすれば足りる。

二 青海ホシヨト部の成立とその範圍

ついで、移動してきたホシヨトは如何に組織されたかという問題であるが、この問題については、中國文獻を参照しなければならぬ。

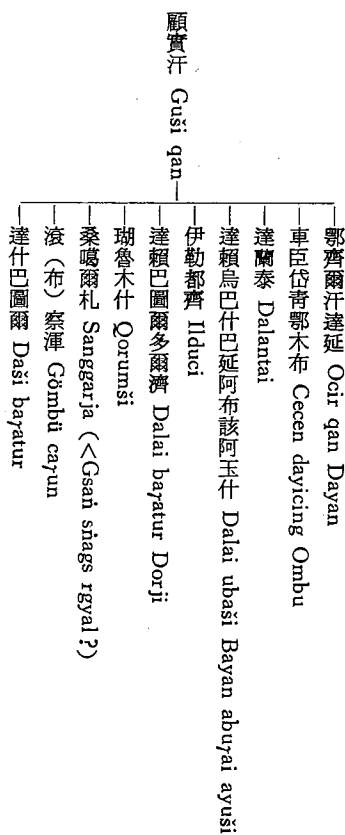
グシハンには十人の子があった。そのうち長子のオチルハンダヤン *Ocir qan Dayan* はチベットに行き、後に第二代のチベット王となった。九男のゴン(ボ) *Chaḡun Gombu carun* は後繼者がなかったから、結局青海には八人の子が残されたわけである。この八子が青海湖近邊の牧地によって、當時西北最強の遊牧集團を形成していた。世に「和碩特八台吉」または「青海八台吉」と稱されるのがこれで、表傳卷八一、五丁表(要略卷一〇、六丁裏同様)には、

鄂齊爾汗弟、自袞布察渾無嗣外、餘八人皆居青海、故其裔稱和碩特八台吉。

とあり、朔漢卷四二、六丁裏には、康熙三十六年に青海タイジ等を招撫したときの康熙帝の諭旨に、

召爾等青海八台吉。

とあるものである。^⑧



〔第一表 グシハンの十子〕

大清一統志卷五四六青海厄魯特三丁表及び表傳卷八一、三丁表によれば、グシハンは生前に、青海ホシヨトを左右兩翼に分ち、左翼にダヤン、オンボ、ダランタイ、バヤンアブガイアユシの四人を置き、右翼にイルドゥチ以下六人を置いたという。一見右のハタイジの稱と矛盾することくであるが、恐らく十人を左右翼に分ったのが最初で、そのうちダヤンが抜け、チャグンは世を去ってハタイジとなったのであらう。ダヤンの嫡長ダライハン Dalai qan の系統は、前述のごとくラサに在ったが、その他のダヤンの諸子は青海に残って牧地を持っていたから、左右翼が分たれたときは、この系統も青海にいたしなければならぬ。

さて左右翼の範圍であるが、先ず左翼について、右の一統志卷五四六及び遊牧記に示す境界を挙げ、その説明を行なう。

東——西寧邊外棟科爾廟。十三排圖の冬科爾 Ston skor がこの棟科爾に當るであらう。或はその近傍の麥達里珠克特亭 Maidari juktehen (彌勒廟)^⑧が棟科爾廟と呼ばれるものかも知れぬ。

西——嘉峪關邊外洮賓河。嘉峪關の東南を東北から西南へ流れる托來河 Taulai yool (北大河)である。十三排圖では

桃來河である。

南——西寧邊外博羅充克克北岸。ボロチュンケク河 Boro cingkeg tool は西寧の北を流れる湟水の上流の一支流である。

北——涼州邊外西喇塔拉界。シラタラ（シャラタラ）Sira tala は遊牧記には説明がないが、普通大草灘または黃草灘と呼ばれる草原である。新志卷三、一〇丁表に大通衛を説明して、「西寧府西北一百一十里」といい、また、

北至大通協城大雪山一百二十五里、其山通大草灘、接連涼州府界。

とあるから、大通協城（青海省大通縣）の東北の大雪山を越えて涼州の近くにこのステップが広がっていたのであらう。

東南——西寧邊外拉喇山。拉喇山は遊牧記には、

一統志、納拉薩拉嶺在西寧邊外八十七里、其西有齊布秦爾嶺相近、又有哈拉嶺、按拉喇山即哈拉嶺也。

と説明している。納拉薩拉嶺は Naran saran dabaya で、西寧と黃河の間にある日月山を指し、齊布秦爾嶺は恰不恰 Cabaiyar 附近の山であらう。哈拉嶺も恐らくその近くで Lha la（神山）の意とすれば、それは拉喇と寫されてもよいわけである。遊牧記の説明に従いたい。

西北——甘州邊外額濟納河。オチナ河 Ecine tool である。

東北——永昌邊外。永昌は甘肅省武威縣の西北にある。

西南——嘉峪關邊外布隆吉爾河岸。ブルンギル河 Bulangir tool は普通疏勒河と呼ばれ、嘉峪關の西、玉門縣の西邊を通る。遊牧記はやはりこの河をブルンギル河と見ているようである。しかし十三排圖では嘉峪關の西南邊に布隆吉爾必拉は二種あり、一つは北左翼旗の南邊のブルンギル即ちエムネブルンギルであるが、多分ここでのブルンギルはこれを指したものであらう。この河は青海湖の西邊にあるが、現在の地圖では比定できない。

これによって左翼は大體、西寧から青海湖へかけての線の北側にいたことが分る。右翼の境域もまた一統志卷五四六、遊牧記には次のごとくある。

東——棟科爾廟。右に同じ。

西——噶斯池。遊牧記は、棟科爾廟より西噶斯池まで二千五百里といい、黄河上流鄂靈海 *Oreng nayur* の東北にある固爾班噶斯池 *Urban yasju nayur* (三ガス) をこれに當てている。しかし一統志によると、西寧邊外克騰庫特兒 *Kuilen ketül* から西南木魯烏蘇 *Murui usu* (*Hbri chu*) まで一千五百餘里とあり、ほぼその長さはトンコル廟から三ガスまでの距離と等しい。とすると遊牧記の最初の説明の二千五百里とは一致しなくなる。そこでここにいう噶斯池は、ツァイダム の西邊にあるガスノール *Gasju nayur* と考えたい。この地は軍事上の要點でもあり、グシハシがここを通つて青海へ進駐したことは既に觸れた。遊牧記は方略の董大成の言を引いて、「策妄阿喇布坦出入咽喉要路」といい、その重要性を指摘している。ツェワンアラブダンの使者ばかりでなく、多くのジュンガルが此處を通り、西寧またはチベットへの道としたことは明かであるが、康熙五十六年(一七二一)のツェワンの軍のラサ侵入のときだけは此處を通らずにチャンタン高原を縦斷して往復した。此處を通らなかつたことがこのときの作戦の祕匿に成功を齎したのである。

南——松潘邊外漳臘嶺。遊牧記には、

嶺在生蕃弓檳地界、有漳臘河、出其陽、西南流入松潘廳界、南合大江、廳北四十里、有漳臘營、設遊擊駐防。とあるから、松潘の東方または東北方にあるのであろう。中國の地圖では漳臘營なる地名があるが、腊は臘と同音同義であるから漳臘嶺は、同文志卷二〇、四三丁表にある將拉 *Byan la* と同一であろう。

北——博羅充克克南岸。ポロチュンケク河については説明ずみ。

東南——洮州邊外達爾濟嶺。遊牧記に、

達爾濟嶺即一統志之托禮嶺也、在洮州衛邊外、洮河發源處、即西傾山之脊嶺最高大。

とあるので、多分洮州（甘肅省臨潭縣）の西方にあるのであろう。達爾濟は Dar rgyas と考えられる。一統志に従えば托禮嶺 Tho li dabaya と同一になる。

西北——嘉峪關外塞爾騰、西爾噶拉金界。西爾噶拉金は十三排圖の西爾噶爾近必拉 Siratalcin bira を指し、現在圖の黨河またの名沙拉果勒河 Sira rool であらう。塞爾騰は、遊牧記に、

在舊沙州衛西南三百餘里。

とあり、即ち十三排圖の色爾騰必拉であらう。色爾騰は Saltayan（叉、股）であらうか。

東北——西寧邊外克騰庫特爾。クイテンコトル Kuiten kotul は説明ずみ。

西南——穆魯烏蘇河。穆魯烏蘇は前掲のごとくムルウス河で、中國では通天河ともいう。下流は金沙江。

これによって右翼は、青海より南、ムルウスの線までであることになる。即ち左右翼の境界線は西寧、青海湖を結ぶ線で、それより北が左翼であり、南が右翼とされたのである。

ところで青海史は左右翼の建置について、次のような興味ある記述をしている（青海史四三七頁）。

第五代ダライラマはゴンソ Sgo mah の無任所ラフ Bla zur のホルガワンチンレーフンドゥブ Hor Nag dbari bphrin las lhun grub にノムンハン No min han（＜Nomun gan）の稱號を與え、青海の地に遣わせり。彼到りてジュラグ Hju lag の高地のシエグシャパートン Gug ça pad ston の河の合流點の、ジュンガル（＝ホシヨト）によりて前より保持されたるタグナゴウシ Stag sna gohu si 寺院の近傍に、すべての首領を集め、各々の住地の根據を配分したり。即ち「それらを」右翼、左翼となし、「人びとは」後の乙卯の年（七十）まですべて和し、人家畜は増加しつつ、幸福に時を過して住まえり。

この文は、前に觸れた左右翼の配分がグシハンによって行なわれたという中國側の記録と矛盾することくである。しかし

その内容の詳細なのを見ると中國側の記録より極めて具體性をそなえている。唯ノムンハンによって何時左右翼の分置が行なわれたかの時期が、實はこの文では不明なのである。そこでこのノムンハンと呼ばれたガワンチンレーフンドゥブに關する年代を問題としてみよう。

それには彼の座主となっていたツェンボガンデンダムチョエリン *Btsan po dgañ ldan dam chos glin* (通稱「マン寺」) に少しく觸れなければならぬ。ヴァイドリアセルボ *Vaidūrya ser po* に據ると「ツェンボガンデンダムチョエリンはチオルジエ・テンルブギャムツォ *Chos rje Don grub rgya mtsho* の施主 *Yon bdag* であるセチェンホンタイジ *Se chen hun thaji ji* へ *Secen gong tayji* によって建立されたが (VSP, p. 268) 」。その創建の年次は、ワイリー氏 *T. V. Wylie* によれば「一六三七年または一六四九年である (DLGS, p. 195, fn. 757) 」。そして「現在の座主」はガワンチンレーフンドゥブであるというが (VSP, p. 268) 」。ヴァイドリアセルボの完成した年代は、ペテック氏 *L. Petech* によれば「一六九八年であるから (VSP, Forward, p. 13) 」。この頃ガワンチンレーは既にガンデンダムチョエリンの座主となっていたのであろう。ところで彼に青海への使者を命じた第五代ダライは、一六八二年に歿しており、第六代ダライが一六九六年に坐臥するまでは、なおデシのサンギェギャムツォ *Sde srid Sañs rgyas rgya mtsho* が第五代の名で國事を司っていた。このことは十分考慮しなければならないが、しかし生きていた第五代が直接ガワンチンレーに命を下したものとすれば、彼の青海行は第五代の死以前即ち一六八二年以前ということになるであらう。といつてもその上限はグシハンの歿年一六五四年までは到底上り得ない。一六五四年は、彼が座主になっていた時期からは四十年も前のこととなり、この寺院の創設時に近く、その頃彼が青海に來たとは思われないからである。寧ろ我々は、この文にグシハンの名がないことを併せ考えて、グシハンの歿後、第五代ダライの在世中に、グシハンの子孫たちの間に牧地についての紛糾が起り、それを調節するためにガワンチンレーフンドゥブは青海に來たと見たい。即ち第五代ダライの死一六八二年以前の數年以内にこのことがあったと見たいのである。恐らく彼の調停によって、各旗の牧地は再分割され、右翼、左翼の安定を見たのであろう。

なおこの文に關する一二の問題について次に述べておこう。

第一にタグナゴウシ寺院であるが、楊氏はこれを都蘭縣の都蘭國寺とする (AK, p. 83, fn. 151)。しかしジュラグはワイリー氏によれば大通河の別名であり、西寧北方に存在し、都蘭縣は西寧の西南方で距離的に全く相反した位置にある。楊氏はこの矛盾に困惑し、都蘭の近傍に別のジュラグがあるのではないかとした (Ibid.)。しかし青海での集會の土地としては、クンブム、チャガントロガイ以外ではやはり大通河の流域が適當であることを考えると、ジュラグはやはり大通河であり、タグナゴウシ寺院もこの流域にあったとしなければならぬまい。

第二に乙卯の年であるが、楊氏はこれを一六七五年とし、その理由として一六七四年に吳三桂が反し、青海モンゴルは康熙帝の命で兵を動かし、一六七五年にはガルダンが青海を攻撃したことを擧げている (AK, p. 84, fn. 154)。恐らく楊氏はそれらの事件で青海が打撃を受け混亂したが、それまでは青海は平和であったという風に考えたのであろう。しかし青海ホシヨトの吳三桂の軍に對する態度は決して積極的なものではなかったし、ガルダンはこの年には青海を攻撃してはいない。ガルダンは確に一六七八年に青海に侵入しようとしたが、途中で軍を返している。従つてこの年に青海内部に大きな變動が起つたとは考えられない。寧ろ一七二三年 (雍正元年) に起つたロブザンダンジンの反亂で、青海本地は亂れ、一七二五年以來の旗の再編によつて狀態は安定したと見られるから、乙卯の年は雍正末年 (1725) を意味するものと解したい。

三 青海ホシヨト部の系統とその牧地

さてグシハンの青海移駐、その根據地、更にはその後の左右翼の組織化は以上で明かになった。ことの成行きとして當然次には、青海ハタイジの事蹟、遊牧地、またはその子孫の系譜、清朝による旗制の施行の問題を扱わなければならないが、これらに關する史料はチベット側には少く、漢文獻の實錄、朔漠、方略、要略、遊牧記、表傳などに詳しい記載があ

る。尤もこれらの漢文獻も殆どが雍正以後の編纂物で、遊牧記、表傳などは雍正三年（二五）に青海の諸旗が清朝に公認された以後のことを中心に記載する。雍正三年の青海諸旗の公認は、前に觸れたごとく、元年（二五）に起ったロブザンダンジンの反亂の善後策としてなされたもので、亂に際しての清朝への忠誠の度によって、タイジたちは賞罰を行なわれ、その家格を決定されたのである。ロブザンダンジンの反亂とその結末については別稿で述べたので、ここには再説する必要はないが、青海八タイジとその子孫の家格が、清朝の體制内で確定されたという意味で、以下の敘述は雍正の初期まで及ぶであろう。次にグシハンの子孫を長幼の順に従い、長子オチルハンダヤンの系統とその牧地から述べてゆこう。

（一）オチルハンダヤンの系統

ダヤンはグシハンの後を繼いで第二代のチベット王となり、ラサに駐したため、青海八タイジの中には數えられていない。しかしその長子ダライハンギンチュク Dalai qan Güncük < Dkon mchog を除く他の子らはすべて青海に住した。表傳卷八一、三丁表には、

達延號鄂齊爾汗、爲扎薩克鎮國公噶勒丹達什、輔國公諾爾布朋素克、車凌三旗祖。

とあるので、表傳、遊牧記によって系圖を作成すると第二表のごとくなる。

（1）ガルダндаシ Galdan dāši < Dgañ ldan bkra çis 系

ガルダндаシは康熙三十六年にダシバートルに隨つて入朝し、輔國公に封ぜられた。康熙五十九年（七〇）には清軍に従い、新ダライラマをラサに送り、その功によって鎮國公に晉み（方略卷二一、雍正元年二月乙亥の條）、ロブザンダンジンの反亂にも従わず、雍正三年にジャサクを授けられた（表傳卷八六、二丁裏）。これが南左翼後旗 Entün jējün yar qoyitu qosiyun であるが、その牧地については、遊牧記のその旗の條に、

案舊圖、噶爾丹達什牧地在大通河南岸、青海西北。

達賴汗袞楚克

索諾木達什

納罕遜都布 (僧)

諾爾布朋素克 (南右翼後旗) 達什巴勒珠爾 (二〇) 車凌 達什扎布 (二四)

諾木喀 (五)

諾爾布僧格 (六)

達延

索諾木袞布 (二)

垂濟扎木素 (七)

索諾木多爾濟 (二二)

車凌

拉特納錫第 (一一)

多爾濟 (三)

垂庫爾 (八)

噶勒丹達什 (南左翼後旗)

丹津那木扎勒 (二五)

索諾木巴勒濟 (二六)

朋素克

阿喇布坦鄂木布

墨爾根諾顏 (三)

班珠爾 (九)

車凌 (北前旗)

色布騰達什

滾楚克扎布 (一三)

吹鍾扎布 (一七)

〔第二表 ダヤンの系統〕

〔第二表註〕

- 〔一〕 Sonom gombu < Bsod nams mgon po 〔一〕 〔二〕 Dorji < Rdo rje 〔三〕 Merger nayan
〔四〕 Nayan sundub < Nag dhan gsuh grub (?). Nag dhan 〔五〕 Nayan < Nam mchah.
〔六〕 Norbu sengge < Nor bu sen

ge [七] チャイジニャムン Cuyji jamso<Chos kyī rgya mtsho [八] チャイクル Cuyiqur<Chos skor [九] シルニャン Baljur<Dpal lhyor [一〇] ダンベニシヤン Dasi baljur<Bkra gis dpal lhyor [一一] ノンヤニシ Sonom dorji<Bsod nams rdo rle [一二] ラニナニヤ Ratnasidi<skt. Ratnasiddhi [一三] シンチャニャン Gñucūkyab<Dkon mehog skyabs [一四] ダンニャン Dasiab<Bkra gis skyabs [一五] ダンジンナムニャン Danjin namjal<Bstan btsin nram rgyal [一六] ノンバニシ Sonom balji<Bsod nams dpal rgyas 清史稿藩部五には索諾木丹勒濟とあり、これを正しつとすれば darji<dar rgyas となる。 [一七] チャイジニャン Cuyjungjab<Chos skyon skyabs

とあり、十三排圖に「公嘎爾丹達喜」と標される地點であらう。

(2) ノルブブンツォク Norbu püntsük<Nor bu phun tshogs 系

父ソノムダシ Sonom dasi<Bsod nams bkra gis は輔國公に封ぜられたが、康熙五十一年卒し、同年三月に遣官致祭された(聖祖實錄卷二四九、一七丁表)。子のノルブブンツォクは五十三年正月に輔國公を繼ぎ(前掲書卷二五八、五丁表)、五十九年にはやはりダライの入藏を助け、その功によって雍正三年に扎薩克を授けられた(表傳卷八六、六十裏)。南右翼後旗 Emün barayun yar goyitu qosiyun がそれで、牧地は遊牧記には、青海の東岸謨爾穆山 Molun へ Smon lam の西北、巴哈淖爾 Baya nayur の東となっている。十三排圖では「公諾爾布益楚克」と標される地點がそれであらう。

(3) ツェリン Tsering<Tshe rin 系

ロブザンダンジンの反亂のときは、脅迫されてその一味となったが、積極的に行動はしなかったということで輔國公の爵は留められ、雍正三年に扎薩克を授けられた(表傳卷八六、八丁裏)。北前旗 Qoyitu emün qosiyun がこれであるが、牧地は遊牧記では、「在青海西岸」とし、註として、

按圖、牧地布喀河 (Buga rool) 南岸、東流入青海處。

とあり、また、

康熙圖、此爲貝勒噴蘇克王扎兒忒黑巴^{東?}⑩、及公達什公多普駐牧處、十三排圖、此爲貝勒彭蘇克旺扎爾駐牧處。

という。達什東多普の牧地は、十三排圖ではブハ河南岸に「公達喜敦多ト」の標點があり、またその中流に「貝勒彭蘇克旺扎爾」の牧地が標せられている。遊牧記は恐らくこれによつたのであらうが、それが何故ツェリンの牧地になるのかは明かでない。しかし十三排圖で、青海の東岸ボロチュンケク河の上流に「公策梭」と書入れられているのが恐らく正しい牧地なのであらう。遊牧記の著者はこの標點を見落したのだと考えられる。ツェリンの後の子の色布騰達什 *Sehen dasi* < *Tshe brian bkra çis* によつて、雍正七年十一月に繼がれた（方略卷一九、雍正七年十一月乙未の條）。

以上三家の牧地が、青海の東岸から北岸にかけて存在しているのを見ると、ダヤンオチルハンの青海における根據地はまさにこの方面にあつたと見るべきであらう。

なおダヤンの子のプンスク *Pünsük* < *Phun tshogs*（朋素克）は康熙三十六年のダシバートルの入朝に際し、行動をともし、三十七年正月には貝勒を授けられている（聖祖實錄卷一八七、二丁表、要略卷一〇、二〇丁裏）。また彼は四十二年十一月にも入朝し、當時西安に駐留していた康熙帝に謁見し（聖祖實錄卷二二四、五丁裏）、四十四年閏四月にも遣使進貢している（聖祖實錄卷二二〇、一五丁表）。その子のアラブダンオンボ *Arabdan ombu* < *Rab brian dbon po* はロブザンダンジンの反亂に加わり、雍正二年に處刑されてこの系統は絶滅した。

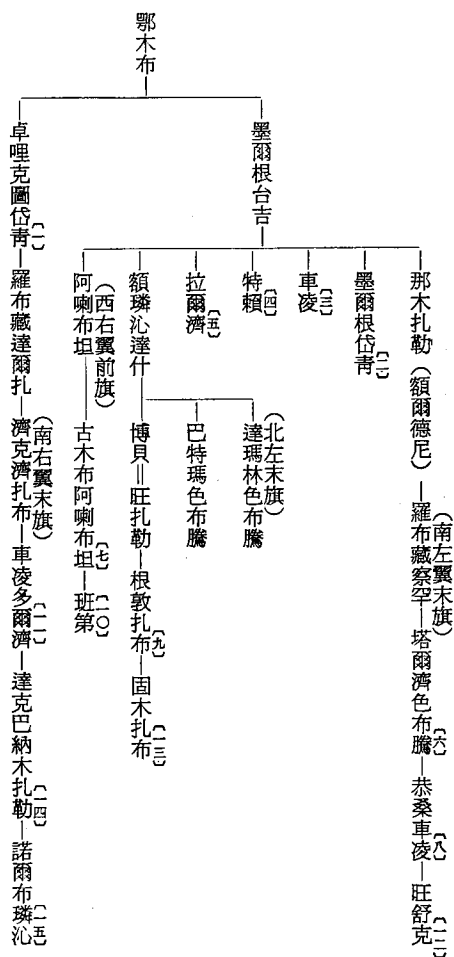
(二) オンボの系統

表傳卷八一、三丁裏には、

鄂木布號軍臣岱青、爲扎薩克台吉羅卜藏察罕、濟克濟扎布、達瑪璘色布騰、阿喇布坦四旗祖。

とある。系圖を作成すると第三表のごとくなる。

オンボは順治六年十月に、弟のホルムシとともに、西寧城を占據した回族を破つてこれを降した功により（後述ホルムシの項参照）、土謝圖巴圖魯載青 *Tüsiyetü bayatur dayicing* の號を賜っている（世祖實錄卷四六、一四丁裏）。順治十三年



〔第三表 オンボの系統〕

〔第三表註〕

- 〔一〕 ジョリクトダイチン Joritsu dayicing 〔二〕 メルゲンダイチン Mergen dayicing 〔三〕 シリン Tsering < Tshe rin
 〔四〕 トーライ Taulai (?) 〔五〕 ラルジ Lari < Lha rje 〔六〕 タルジヤンテン Tarij sehten < Thar rgyas tshe brtan 〔七〕
 オンボアラブダン Gombu arabdan < Mgon po rab brtan 〔八〕 グンザンンヤン Gundzang tsering < Kun bzai tshe rin 〔九〕
 ゲンズンヤン Gendunjab < Dge hduu skyabs 〔一〇〕 ンニヤ Bandi < Bandhe 〔一一〕 シリンンヤン Tsering dorji < Tshe
 rin dor rje 〔一二〕 フンニヤ Wangcuy < Dban phyug 〔一三〕 ヲンニヤン Qumjab < Kun skyabs 〔一四〕 ヤンナヤン
 Dayba namjal < Grags pa nam rgyal 〔一五〕 ノンニヤン Norbu rin cin < Nor bu rin chen

八月には、ダライバートルとともに境界を守るべきことを帝から諭されているから(前掲書卷一〇三、一〇四裏)、當時の青海の實力的指導者はこの二人であつたのであらう。

その子のメルゲンタイジ *Mergen tayiji* もこの地方で勢力を張っていたらしい。康熙六年に墨爾根部落の出口事件が起っているが (STR, p. 196) この墨爾根根についてアーマッド氏は、拉篤祐の入藏を妨害した墨爾根台吉と同一人と見ている (STR, p. 206, fn. 4)。即ち康熙十三年七月に、康熙帝が吳三桂の亂に際し、ダライラマに遣わした使者、拉篤祐とラマの丹巴德穆齊 *Dam pa* (又は *Bstan pa*) *demci* はともに西寧で進藏をメルゲンタイジに妨害された。結局このときはダライの取りなしで事なきを得たが (聖祖實錄卷四八、一九丁表)、このことは當時なお青海タイジがダライの政治的影響下にあったことを物語るものである。このメルゲンタイジが何人であるかは、ア氏も何等言及していないが、オンボの子のメルゲンタイジと見て誤あるまい。

續いてその子のナムジャル *Namjal* < *Rnam rgyal* は康熙三十六年のダシバートルの入朝に隨つて康熙帝に謁し、貝勒の爵位を與えられている (朔漢卷四七、一八丁表、卷四八、一丁表、聖祖實錄卷一八七、二丁表、要略卷一〇、二〇丁裏)。康熙三十五年十二月並に四十一年正月に、彼は水草灘 (シャラタラ) を遊牧地として與えられんことを願ったが、帝はその地が既に内地人民の雜居する所で、内地に遊牧させることはできないとして許可を與えなかった (朔漢卷三四、二三丁裏、聖祖實錄卷二〇七、七丁表。水草灘は水草がよく、青海遊牧民の垂涎的であり、既にその父メルゲンタイジもこれを請うて許されなかった地である (要略卷九、九丁表)。この地は同時に涼州から西寧への要衝にも當つており、その故に清朝としては軍事上の配慮もあつたであらう。ナムジャルは四十九年に死し、その九月に遣官致祭されている (聖祖實錄卷二四三、八丁表)。

(1) ロブザンチャガン *Lobdzang cayan* 系

ロブザンチャガンは祖父メルゲンタイジ、父ナムジャルを通じて、オンボの正統に當る。ロブザンが父の後を繼いで貝勒になったのは、康熙五十年正月で (聖祖實錄二四五、五丁表)、五十一年八月には北京に入謁した (前掲書卷二五〇、二九丁表)。彼はロブザンダンジシの反亂に一度は加擔したが (方略卷二二、雍正元年十一月癸巳の條、表傳卷八四、一〇丁裏)、のち

同族のジクジジャブとともに清軍に來投した（方略卷一三、雍正二年二月壬子の條）。よって雍正三年扎薩克一等台吉を授けられた（表傳卷八四、一〇丁裏）。南左翼末旗 *Emün jegün yar adar qosiyun* がこれら、牧地は遊牧記ではボロチュンケク河源であるというが、十三排圖では大通河の北岸、永安衛の西方になっている。何れが正しいか明らかでないが、父祖の代に大草灘に出ることを再三清朝に願っているところを見ると（表傳卷八四、九丁表—一〇丁表）、涼州に近い大通河のあたりがもともとの牧地であったのかも知れない。しかしロブザンチャガンがロブザンダンジンと離れて清軍に歸順したときは（表傳卷八四、一〇丁裏、方略前掲）、

詔置西寧口外。給茶麥諸物養之。

とあるのを見ると、ボロチュンケクの方が近いようにも見える。何れとも決定できない。

(2) ジクジジャブ *Jirjab* < *Hjigs byed skyabs* 系

父ロブザンダルジャ *Lobdzang darja* < *Blo bzai dar rgyas* は康熙五十一年八月に入朝し（聖祖實錄卷二五〇、二七丁裏）、ダライラマの入藏を護送したときに、途中ゴマン廟で病死した^⑧（表傳卷八五、九丁裏）。雍正元年ジクジジャブはロブザンダンジンの反亂に味方したが、二年にロブザンチャガンとともに清軍に降服し（方略前掲）、天子はこれを脅從せられたものと見なし、悔悛の情を認めて扎薩克一等台吉を授けた（表傳卷八五、一〇丁表）。南右翼末旗 *Emün barayun yar adar qosiyun* がこれで、牧地は遊牧記に・

大通河南岸沙扎克圖阿林之陰。

というが、十三排圖では、同じく大通河の南沙拉克圖阿林の所に貝勒羅布藏達爾扎の名が出ている。沙扎克圖は沙拉克圖が正しく、*Sira kötül dabaya* の音譯であろう。ロブザンダルジャは康熙五十一年に入朝したときは固山貝子に晉められており（表傳卷八五、九丁裏）、ジクジジャブもロブザンダンジンの反亂のときは輔國公であったから（前掲書）、十三排圖の貝勒は誤であらう。

(3) ダムリンセブテン Damarin sehten < Rta mgrin tshe brtan 系

父のエリンチンダシ Erincin dasi < Rin chen bkra gis は康熙三十六年ダシバートルの入朝に従い、翌年正月に貝子の爵を授けられた(要略卷一〇、二〇丁裏)。彼はロブザンダンジンとの反亂に加擔したため爵を削られたが、雍正三年にダムリンセブテンが扎薩克一等台吉を授けられた(表傳卷八七、三丁裏)。蓋しエリンチンダシの長子バトマセブテン Batma sehten < Padma tshe brtan は早く死し、子がなかったからである。ダムリンは乾隆十四年に死し、また子がなかったから、弟のボーバイ Boobai が更に後を繼いだ(表傳卷八七、四丁表)。ボーバイ(博貝)の名は表傳、遊牧記、清史稿などに見えるが、同文志には博巴(mong. Boba, tib. Bod pa)とある。ここでは博貝に従っておきたい。ボーバイも早くに死し子がないため、乾隆二十年にバトマセブテンの子ワンジャル Wangjal < Dban rgyal が後を繼いだ(表傳卷八七、四丁表)。北左末旗 Qoyitu barayun yar adar qosiyun がこれで、牧地は遊牧記に、

布喀河源沙爾諾爾之西。

とあり、十三排圖には帳幕の標記はないが、沙爾諾爾 Sira nayur は明かである。恐らくこの湖の西岸がその牧地であろう。

(4) アラブダン Arabdan < Rab brtan 系

ロブザンダンジンの亂に、これに脅誘されたが従わず、雍正三年に扎薩克一等台吉を授けられた(表傳卷八七、五丁表)。西右翼前旗 Barayun barayun yar emün qosiyun がこれで、牧地は大通河の北岸にあり、その南岸に前左翼頭旗がいるというから(遊牧記)、烏蘭穆倫必拉の北岸あたりであろうか。前左翼頭旗の位置については後に述べる(九七頁、エルデニエルケトクトネーの條参照)。

四旗の位置を見ると、北右末旗と西右翼前旗はともに離れて存在しているが、南左翼末旗と南右翼末旗とは相近く、メルゲンタイジ、ナムジャル、ロブザンチャガンの嫡統の根據地からしても、最初は永安衛の西、大通河の北邊におり、後

その他の系統が分居したと見なすべきであらう。

(三) ダランタイの系統

表傳卷八一、三丁裏には、

達蘭泰爲扎薩克郡王額爾德尼額爾克托克托爾、台吉車凌多爾濟二旗祖。

とあり、その系譜は第四表のごとくである。

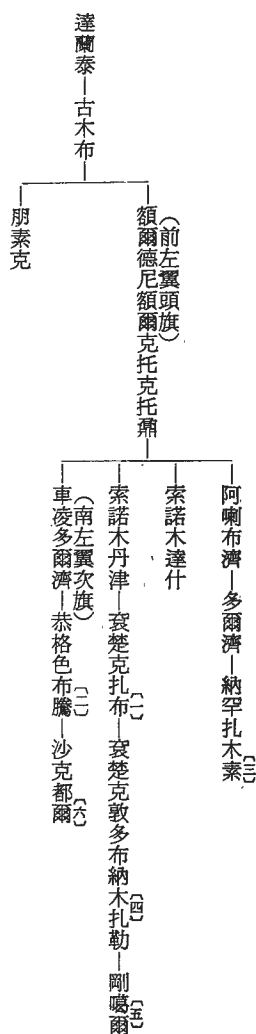
ダランタイについては、中國文獻には何等の記録もない。彼の後を繼いだのはゴンボ Gömbü Mgön po で、ゴンボはガルダンの亂には、清朝のツェワンアラブダンの工作の使者の道案内を勤め、糧秣駝馬を給している。青海タイジ等の私盟にも拘らず、清朝への忠誠を盡した（要略卷一〇、一二丁表）。恐らくこのような事情のためであらう、彼は宗家のラザンハンとは不和であった。^⑥歿したのは多分康熙四十三年で、四十四年正月に遣官致祭されている（聖祖實錄卷二九、七丁表）。

表傳はこの系統に限って最初の遊牧地を示して（表傳卷八三、五丁表）、

袞布遊牧嘉峪關外、隣哈密、準噶爾及諸回使住來、必經之。

といっているので、恐らく嘉峪關外玉門關ブルンギル河のあたりに彼等は遊牧していたのであらう。康熙三十六年には、ゴンボは子のプンツク Püntük Phun tshogs（朋楚克）をダシバートルに附けて、自らの代りに入朝させ（朔漢卷四七、一八丁表、聖祖實錄卷一八六、七丁裏、要略卷一〇、二〇丁表）、プンツクには貝子の位が與えられた（朔漢卷四八、一丁表、聖祖實錄卷一八七、二丁表、要略卷一〇、二〇丁裏）。

なおゴンボの名は、朔漢卷四〇、三四丁裏では阿齊滾布巴圖爾台吉、同じく卷四七、一八丁裏では阿七滾布、聖祖實錄卷二一九、七丁表では阿奇滾布巴圖爾とあり、表傳卷八三、五丁表では阿齊巴圖爾をゴンボの稱號とする。一方同文志卷



〔第四表〕　ダランタイの系統

〔第四表註〕

〔一〕グンチュクジャブ Güncükjab < Dkon mchog skyabs 〔二〕クンガーセブテン Kunga sebtan < Kun dgah tshe brtan
 〔三〕ナハンジャムン Nayan jamso < Nag dban rgya mtsho 〔四〕グンチュクドンドブナムジヤル Güncük dondub namjal
 < Dkon mchog don grub nam rgyal 〔五〕カンガン Qangal = Bskan gso 〔六〕シャツルン Šaydor < Phrag rdor

一七、二丁表では伊齊巴圖爾古木布とする。阿齊、阿奇、阿七は Aci (榮譽、功績、孫)、または Aja (幸福) であり、伊齊は同文志では蒙古綴字は Ici とされるが適當な意味を發見できない。これは恐らく Aci または Aja を正しいと見なすべきであらう。

(1) エルデニエルケトクトネー Erdeni erke tofionai 系

康熙四十四年七月、エルデニエルケトクトネーはゴンボの後を繼いだ(聖祖實錄卷三二、一七丁表)。彼は五十九年にダライの入藏を送り、功を以て郡王に封ぜられ(方略卷一、雍正元年二月乙亥の條)、ロブザンダンジン^⑧の亂には、これに抵抗して子のアラブジ Arabji < Rab rgyas (阿喇布濟) とともに功を立て、雍正三年に扎薩克を授けられた(表傳卷八三、九丁表)。雍正九年のトルゴートのノルブ Norbu < Nor bu の亂のときもこれを討つて平定した。前左翼頭旗 Emün

jegün yar terigün qosırun がこれで、その後は第三子のソノムダンジン Sonom danjin へ Bsod nams bstan hdsin が繼いだ（表傳卷八三、一一丁表）。

牧地は遊牧記に、「大通河南岸」とあるが、註には、舊圖により「烏蘭木倫河北、額集納河南」とあるから、十三排圖にある額集納必拉 Eeine bira (Eeine fool) と烏蘭穆倫必拉 Ulaŋan müren bira の間で、エルデニエルケトクトネーの標點よりは少しく南へ下った所であろう。

(2) ツェリンドルジ Tsering dorji へ Tshe rin rdo rje 系

ツェリンドルジが扎薩克になったのは、一に父のエルデニエルケトクトネーの功績による。エルデニは生前既に扎薩克とされたが、雍正九年頃に、老齡を以て王爵を子に譲渡せんことを願った（世宗實錄卷一〇九、二五丁表、方略卷二五、雍正九年八月丁巳の條、表傳卷八三、一〇丁裏、同卷八八、九丁裏）。雍正帝はその子の何れを選ぶかを彼に委ねたが、彼は第三子のソノムダンジンを後嗣に推薦した（世宗實錄卷一一一、一五丁裏、方略卷二六、雍正九年十月己酉の條）。そこで朝廷はエルデニの功に酬いるため、次子のソノムダシ Sonom dasi へ Bsod nams bkra gis を協理台吉 Tusalayci に、而して長男のアラブジが既に死したのでその子のドルジ Dorji へ Rdo rje を輔國公に封じた。旗地については、やはりエルデニの奏により、その十佐領のうちソノムダンジンに十分の六を與え、十分の四を第四子ツェリンドルジに與え、ソノムダシはソノムダンジンに隸し、ドルジはツェリンドルジに隸せしめることとした。その結果、ツェリンドルジが扎薩克一等台吉になったのである（表傳卷八八、一〇丁表）。これが南左翼次旗 Emün jegün yar ded qosırun で、その牧地は遊牧記に、「有鹽池」とし、註して、「柴集河水 (Caviji fool) がこれに注ぐ」とあるから、十三排圖に青海湖の南岸、柴集必拉の注ぐ達布遜淖爾 Dabusun naur がその地であろう。

なお遊牧記同條には、

案康熙圖、此爲親王魯普藏丹巾衣忒黑巴牧地、卽羅卜藏丹津也。

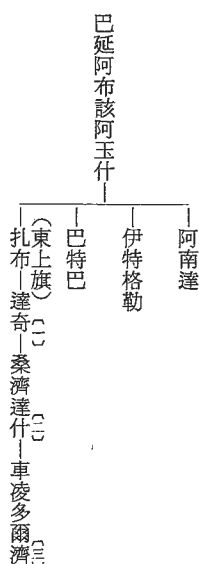
というから、ここが以前にはロブザンダンジンの牧地であつたらしい。「衣忒黑巴」は滿州語 i. tehe ba (の居住した所) の音譯で、張穆はこれを人名のうちに考えたのであろう。

(四) バヤンアブガイアユシの系統

表傳卷八一、三丁裏には、

巴延阿布該阿玉什、號達賴烏巴什、爲扎薩克台吉扎布一旗祖。

とあるが、バヤンアブガイはもと伯父バイバガス Bayibayas の養子であつた。順治六年三月に朝貢し來り(世祖實錄卷四三、四丁裏)、同十三年二月にも清廷に貢している(前掲書卷九八、四丁裏)。また十四年七月(前掲書卷一二〇、一九丁裏)、十六年閏三月(前掲書卷一二五、一〇丁裏)と續いて入貢している。彼は子十六人をもうけたが、そのうち十二人が西套(アラシャン Alašan)に移り、四人が青海に住した(表傳卷七九、一丁裏)。扎布はその末子で、勿論青海に留まつた系統であ



〔第五表 バヤンアブ
ガイアユシの系統〕

〔第五表註〕

- 〔一〕ダキ Daki。同文志卷一七、五丁表のチベット綴では Ta khi。意味不明である。〔二〕サンジタン Sangjai dasi Sans
ryas bkra çis 〔三〕シャリンブルシ Tsering dorji < Tshe rin rdo rje

る。系圖は第五表のとおりである。

(1) ジャブ Jab < Skyabs 系

バヤンアブガイアユシの子らは、右に述べたごとく「青海及び西套に分牧した」が（表傳卷八七、八丁表）、その長子で後繼者の和囉哩 Orolji（稱號は巴圖爾額爾克濟農 Bayatur erke jinong）のときにガルダンに襲われ、西套系では最初に清朝に内附した。清朝はこれにアラシャンに賜牧し、扎薩克を授けたが、その弟たちのこれに附したものが多く、結局青海に留まったのはアナンダ Ananda < Ananda、イテゲル Itegel、ムンム Batma (?)、ジャブの四人であった（前掲書同卷八丁裏）。

ジャブは康熙三十六年に内附し、雍正三年扎薩克一等台吉を授けられた（前掲書）。東上旗 Jegün degedü qosirun がこれで、牧地は遊牧記では青海湖東北岸であり、東は南右翼後旗、西は青海湖、南はジュンガル系の右翼頭旗、北は前左翼頭旗に接すると注されるから、伊克哈爾吉必拉 Yeke qayirgi tool の河畔にいたものであろう。十三排圖ではその根據地は何等示されていない。また三人の兄弟についての記録はないが、これもジャブとともに近邊に遊牧していたものと考えられる。

(五) イルドゥチの系統

表傳卷八一、四丁表には、

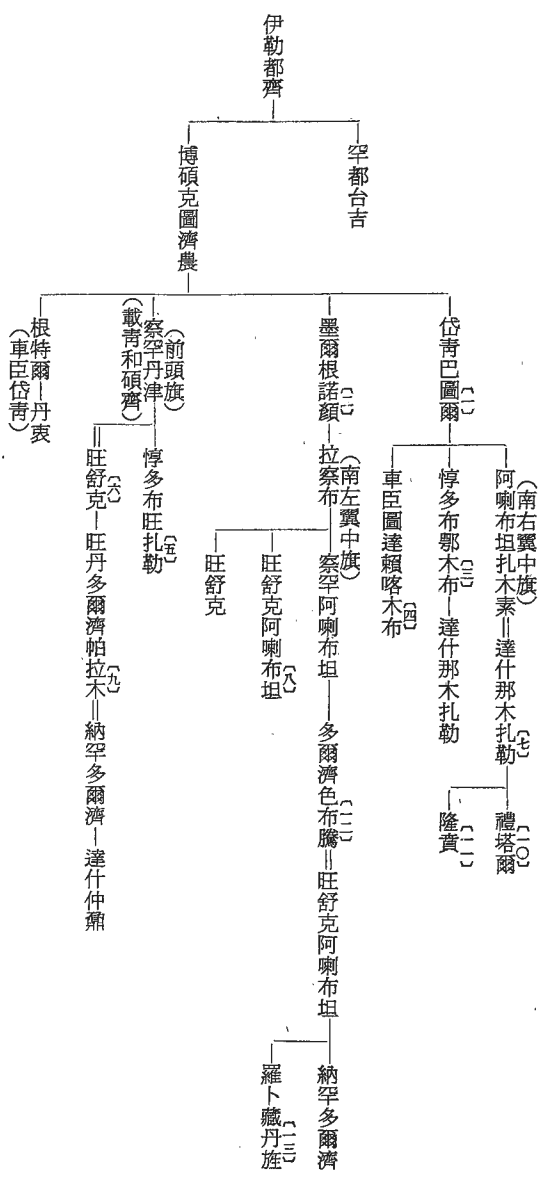
伊勒都齊爲扎薩克親王察罕丹津、輔國公阿喇布坦扎木素、台吉察罕喇布坦三旗祖。

とあり、その系圖は第六表のごとくである。

イルドゥチの長子は罕都台吉 Qandu (< Mkhah ngro) tayiji である。順治十八年閏七月に、第五代ダライラマは千都台吉とともに北勝州（雲南省永北縣）で茶馬貿易を行なうことを願ひ、許されているが（聖祖實錄四、九丁裏 STR. p. 200）。

〔第六表註〕

〔一〕ダイチンバートル Dayicing bayatur 〔二〕メルゲンノヤン Mergen noyan 〔三〕ムンムンオンチ Dondub ombu < Don grub dbon po 〔四〕チハチハンテダライカンチ Cecenti (?) dalaï qamho (< mkhan po) 〔五〕ムンムンドンシヤン Don-dub wangjal < Don grub dhai rgyal 〔六〕ムンムン Wangcuy < Dhai phyug 〔七〕ムンナムシヤン Dasi namjal < Bkra cis nam rgyal 〔八〕ムンムンチンチン Wangcuy arabodan < Dhai phyug rab brtan 〔九〕ムンムンムンムン Wangdan dori palam < Dhai ldan rdo rje pha lam 〔一〇〕ムンムン Layidar < Las thar 〔一一〕ムンムンムンムン Lobdzang darjin < Blo bzah bstan pdsin 〔一二〕ムンムンムンムン Dorji sebtan < Rdo rje tshe brtan 〔一三〕ムンムンムンムン Lobdzang darjin < Blo bzah bstan pdsin



〔第六表 イルドゥチの系統〕

地理的事情からしてもこの干都台吉は罕都台吉であらう。

(1) チャガンダンジン *Čayan danjin* 系

イルドゥチの後を繼いだのは第二子のボショクトジノン *Bošortu jinong* である。表傳卷八二、一丁表以下によれば、彼が清朝に内附したのはガルダン討伐が契機となっている。ボショクトの子ゲンデル *Gender* (根特爾、稱號は車臣岱青 *Cecen dayicing*) はガルダンの女ブム *Bum* (布木) を娶っており、その關係でボショクトは、この討伐のときに使者をガルダンに出した。それが途中で清軍に捕えられたが、清朝ではこれを機會にボショクトに、青海タイジたちの定盟内附することを命じた(要略卷一〇、一〇丁裏)。これに應じて康熙三十六年入朝したのがダシバートルであったが、ボショクトは病を以て至らず、その子のゲンデルを送り、ゲンデルは輔國公の位を授けられた(要略卷一〇、二〇丁裏)。間もなくボショクトは死し、後を繼いだのがチャガンダンジンである。

彼は康熙四十年正月に入朝し、貝勒に封ぜられ(方略卷一、康熙四十年正月戊午の條、聖祖實錄卷二〇三、六丁表)、五十六年には、ラサにおけるラザンハンの死を直に朝廷に知らせてその對策を促した(表傳卷八二、三丁裏)。また屬下のジャイサンをリタン *Li than* に遣わしてチャムド *Čabs mdo* を窺うジュンガルに備えるとともに、自らは五十七年九月に入朝して清廷との連絡を密にした(表傳卷八二、四丁表)。郡王に封ぜられたのはこのときで、五十八年三月である(聖祖實錄卷二八二、二丁表、卷二八三、三三丁表)。五十九年には新ダライの入藏を助けてラサに至った(表傳卷八二、四丁裏)。雍正元年にはゲンデルの子ダンジン *Danjin* (丹津) へ *Bstan ḥdsin* (丹衷) の死にともない、その屬衆を併せて統轄することとなり(方略卷一一、雍正元年六月戊辰の條、世宗實錄卷八、一三丁表、要略卷一一、二丁裏)、また一方ロブザンダンジンとともに青海右翼を領有し、入藏應援の功により親王に晉封された(方略卷一一、雍正元年二月乙亥の條)。表傳卷八二、五丁裏には、

察罕丹津牧河東、近松潘、羅卜藏丹津牧河西、近布隆吉爾地、以河爲界。

とあり、兩人が當時の青海右翼の二大巨頭であったことを示している。

雍正元年(一七二三年)にロブザンダンジン(阿拉巴坦)の亂が起り、このとき、彼はロブザンに攻撃されて河州へ退避したが、親中國の姿勢は全く變えなかった。詳しい事情は別稿を参照されたい。^⑧亂が一應鎮定され、雍正三年に彼は扎薩克に任ぜられたが(表傳卷八二、六丁表)、これが前頭旗 *Emin terigin qosiyun* である。その牧地は方略によれば、「松藩を去ること止か四五日程」であり(遊牧記所引)、十三排圖十排西二では、黄河の支流巴哈哈柳禿必拉 *Baya qalitu too* の流域にその所が標されている。巴哈哈柳禿必拉はバガウルジ河と思われるが、十三排圖のそれは、一般地圖とは反對に、即ち東から西へ流れて黄河に入っている。中華地圖集卷三、青海人文圖によれば、保安河の支流魯藏河の北岸に、それは置かれている。

(2) アラブダンジャムン *Arabdan jamso* < *Rab brian rgya mtsho* 系

アラブダンジャムンについての事蹟は殆ど知られていない。雍正三年に扎薩克を授けられたが(表傳卷八七、一丁裏)、これが南右翼中旗 *Emün barayun yar domda qosiyun* である。その牧地は遊牧記に、「魯察布拉山の西」とあるが、またこの山は西傾山であるという。魯察布拉山は *Klu khra bu lag ayula* じ *bu lag* は *bulay* (泉) の意である(同文志卷一五、一六丁表)。十三排圖では魯察布拉阿林の東、阿齊諾悶汗 *Aja nomun qan* の牧地の南、庫庫烏蘇必拉 *Kuke usu bira* の流域にその所が示されている。中華地圖集では、ラブラン *Bla bran* (夏河) の西の魯藏河の南側にある。

(3) チャガンアラブダン *Cayan arabdan* 系

チャガンアラブダンの父ラチャブ *Lajab* < *Lha skyabs* (拉察布) は、ダライの入藏を送った功により、雍正元年に多羅貝勒となったが(方略卷一一、雍正元年二月乙亥の條)、同年七月起ったロブザンダンジンの反亂に加擔し、清の大軍が至るに及んで、巴爾喀木 *Bar khams* に逃れた(方略卷一三、雍正元年十二月戊午の條、世宗實錄卷一四、一〇丁表)。ただその子のチャガンアラブダンは清軍に來投したので、ラチャブは罪を赦され、鎮國公に降等されて(方略卷一四、雍正二年五月壬戌の條)、三年には扎薩克を授けられた(表傳卷八二、五丁裏)。しかし雍正九年のトルゴートのノルブの反亂にはまた加擔し、のち降服したが(表傳卷八二、六丁裏、卷八八、二丁表)、清朝ではこれを機にチャガンアラブダンを扎薩克一等台吉に

降等した(表傳卷八八、二丁裏)。南左翼中旗 *Enün jegün yar domda qosıfun* がこれで、その牧地は、十三排圖に圖爾根必拉 *Türgen bira* の流域に、「貝勒拉察布所居」と標される所であらう。

以上によってイルドゥチの系統は、黃河の屈曲部トゥルゲン河からクケウス河のあたりに遊牧していたことが分るが、これが右翼の最南端と考えられる。平番奏議によれば(遊牧記所引)、

蒙古扎薩克郡王達什仲鼐等四旗、均在河南、較河北各旗、稍爲富強。

とあり、これらの旗が他と比べて良好な牧地を持っていたことが明かである。達什仲鼐 *Dasi jungnai* < *Bktra qis hbyun* > *gnas* は遊牧記によれば、納罕多爾濟 *Nayan dorji* < *Nag dhan rdo rje* の子であるというから、前頭旗の扎薩克であり、四旗というのは同書の説明によれば、前頭、南左翼中、南右翼中、トルゴト南前の四旗を指している。

[未完]

註

① 山口瑞鳳「願寶汗のチベット支配に至る経緯」(岩井博士古稀記念典籍論集、東京、大安書店、昭和三十八年)。STR, p. 112.

② 康熙三十六年二月における保佐の疏言に、*デバ=サンギェ=チャツ* *Sde pa Sans rgyas rgya msho* の奏が引いてあり、それに、

青海八台吉俱達頼喇嘛之弟子。

なる語が見える(朔漢卷三六、一六丁裏)。サンギェの言葉であるから「青海八台吉」はチベット語の譯と考えられるが、やはり塞外でもこのような呼び方が存した證據ともいえる。

③ *jukchen* は滿洲語で「廟」の意、蒙古古語 *sūme*、チベット語 *lha kham* がこれに對應する(田村實造・今西春秋・佐藤長共編「五

體清文鑑譯解」上巻、京都、京都大學文學部内陸アジア研究所刊、昭和四十一年、No. 10343)。Maidari はトルコ語 *Maitiri* < *skt. Maiteya* (彌勒佛) からきた語であらう。

④ *ゴマン* 寺は、十三排圖に、西寧の北、北川の上流に郭莽珠克特亨 *Sgo man jukchen* とあるもので、青海地方ではクンブムに次ぐ名刹である。

⑤ 羽田明「ガルドン傳考證」(東方學會創立十五周年記念東方學論集、東京、東方學會刊、昭和三十七年、二二五頁。

⑥ 佐藤長「ロブザンダンジンの反亂について」(史林第五卷第六號、昭和四十七年)。

⑦ 或黒巴は滿洲語 *tehe ba* (居住した所)の音譯であらう。康熙圖に滿洲語でこのように書きこまれていたのを人名と誤ったので

あろう。

- ⑧ 貝子チエチエンダイチン＝ロブザンダルジャの死に對する遣官致祭は、康熙六十年夏四月壬寅である（聖祖實錄卷二九二、八丁裏）。このゴマン廟は明かでないが、前註④に記した西寧東北邊のゴマン廟ではあるまい。六十年には既にダライはラサに到着しているの、或はラサのレボン寺のゴマンラサン Sgo nañi bwa tshai であろうか。

- ⑨ 要略卷一〇、一二丁表に即位前のラザンと彼とのやりとりがある。

- ⑩ 同文志卷一七、一〇丁表は Albaci となっているが、漢音よりすれば Arabai とする方が普通ではないかと思う。

- ⑪ とともに嘉峪關の側を通る洮賓河 Taulai pool の上流である。

- ⑫ 協理台吉、管旗章京など旗の幹部級の職掌の説明は、矢野仁一「近代蒙古史研究」（京都、弘文堂、昭和十年）、八八頁に詳しい。

- ⑬ 佐領 Somu(n) は旗の下の組織、本來の意味は「矢」、滿洲語 Niru チヤット語 Madah tsho' 古くは一〇五人の兵士とその家族より成る。現在は「部落」「村」などの意に用いられる。

- ⑭ 遊牧記ではツェリンドルジとドルジの兩方が各々扎薩克になったとく記すが誤で、前者だけが扎薩克になったのである。

- ⑮ 世祖實錄卷三〇、二二丁裏、順治四年甲申の條に、「厄魯特部落の吳爾錫台吉」の朝貢が見えているが、これがダライウバシを指しているものとすれば、彼は四年に既に入貢していたことになる。ただ同時代に、グシハンの兄弟クンドゥレンウバシ Kundi-len ubasi 及びその子のウバシホンタイジ Ubasi qong tayiji が

あり、ともに吳爾錫台吉と呼ばれる可能性はある。しかしこの系統は在ジュンガリアのホシトであり、順治初期の「厄魯特」は青海ホシトを意味すること多いから、順治四年の吳爾錫はダライウバシである可能性の方が大きいといえるであらう。

- ⑯ エムネブルンギル河であつて、敦煌の東のブルンギル河ではない。

- ⑰ 前掲「ロブザンダンジンの反亂について」（一〇頁）。また彼の簡単な事蹟はベテック氏が既に述べている（Notes, p. 282）。なお氏が、チャガンダンジン、ロブザンダンジン、ダヤンが左翼、エルデニエルケトクトネーが右翼を領したとするのは（Notes, p. 285）、左右翼をとりちがえている。

〔略語表〕

表傳＝「外藩蒙古回部王公表傳」

要略＝祁韻士「皇朝藩部要略」

方略＝「平定準噶爾方略」

朔漠＝「平定朔漠方略」

遊牧記＝張穆「蒙古遊牧記」。特に斷りのない限り、同書卷二、

青海額魯特蒙古遊牧所在。

新志＝楊應琚「西寧府新志」

同文志＝「西域同文志」

十三排圖＝「清十三排圖」。特に斷りのない限り同書九排西二

「蘭州府・西寧府」。

中華地圖集＝張其昀編「中華民國地圖集」第三冊、臺北、國防研究院、一九六一年。

梅邊吟=Sun pa mkhan po, *Misho sñon gyi lo rexus sogas bkod pañi tshañs glu gsar sñan shes bya ba*, Vaidūrya ser po, Pt. II, edited by Lokesh Chandra, New Delhi, 1960.

AK=Ho-chin Yang, *The Annals of Kokonor*, Indiana University Publications, 1969.

VSP=Vaidūrya ser po, edited by Lokesh Chandra, Pt. II, New Delhi, 1960.

Notes=Luciano Petech, *Notes on Tibetan History of the 18th Century*, T'oung Pao, vol. LI, Livr. 4—5, 1966.
STR=Zahiruddin Ahmad, *Sino-Tibetan Relations in the Seventeenth Century*, Rome, 1970.
DIGS=Turrell V. Wylie, *The Geography of Tibet according to the 'Dzam-gling-rgyas-bshad*, Rome, 1962.

Chinese people to strong resistance, and brought about a new development in the situation of the anti-Japanese movement in North-western China, as it occurred in a tense atmosphere on the eve of the all out war between Japan and China.

In this article, the author traces the reaction of the Guo-min-dang 國民黨 against this affair, the upsurge and shift of the tone of anti-Japanese arguments through the Xi-pei-xiang-dao 西北嚮導 (published at Xi-an 西安), and the activities of the Red Army 紅軍 which collected at the Shan-pei 陝北 headquarters after Chang-zheng 長征 (the Long March). The author shows through these studies that the time for the formation of an anti-Japanese united front, the formation of which the Communist Party of China had appealed for, was nearing rapidly, making the Sui-yuan affair a turning point.

Rise and Progress of the Qing-hai 青海 Nomad Tribes

Hisashi Satō

A great change occurred in Qing-hai 青海 and Tibet at about the turning-point from the Ming 明 dynasty to the Qing 清 dynasty. That is, Guši qan, the chief of the Qosiγud branch of the Oyirad tribe, leading his branch, entered Lha sa, helped the Dalai Lama establish his regime; after this event his branch was to be stationed at Qing-hai. This branch was called the Qing-hai Qosiγud branch. The eight sons of Guši qan were called the Qing-hai eight tayijis 青海八台吉; they had great political and military influence over the North-western frontier of China.

But the next generation exhibited a growing tendency towards disunity. At the beginning of the 18th century, the power of this branch decreased and, in inverse proportion, the pressure of the Qing dynasty upon this branch increased. Lobdzang danjin, one of the leaders of

this branch, revolted in 1723. In dealing with this rebellion, the Qing dynasty succeeded in bringing the branch completely under its control, by introducing a Banner system similar to what had been introduced in Inner Mongolia.

In this article, the author traces Guši qan's stationing at Qing-hai, the activities and the genealogy and pasture lands of his descendants, in order to obtain a deeper understanding of the situation of the North-western frontier in this period.